

編集後記

大寒を迎え、一年で最も寒さが厳しい季節となりました。世間では解散・総選挙の決定に永田町が揺れ、医療界は2026年度の診療報酬改定を目前に控え情報が錯綜する日々が続いています。日々の診療に追われているとつい目の前のことに心を奪われそうになります。しかし、ふとした瞬間に外に目を向けると暖かな陽射しの日もあり、確実に春が近づいていることを実感します。目まぐるしく変化する医療情勢の真っ只中にいますが、しっかりと足元を見つめ、柔軟に、そして力強く前へ進んでいきたいものです。

さて、本号の「挨拶」では、鹿児島大学眼科学教室教授に就任された寺崎寛人先生より、地域医療との連携と教室の持続可能な発展に向けた力強い決意をご寄稿いただきました。また、「論説と話題」では受賞祝賀会の報告、医師・薬剤師・看護の連携を深める四医師会病院連絡懇談会、横浜での第56回全国学校保健・学校医大会、そして厚生労働省医政局長・森光氏を招いての九州医師会連合総会のご報告です。

「学術」コーナーは臨床に直結する貴重な知見が満載です。九州大学の須藤 信行先生らによる「腸内細菌とストレス関連疾患」では、脳腸相関の視点からの心身の健康を紐解いていただき、非常に興味深く拝読しました。また、橋元 慎一先生の「肺癌早期診断を目指した日常診療」、皮膚科領域からの「神経線維腫症1型」や「水痘・帯状疱疹」の最新知見は、専門外であっても日常診療の中で「疑う目」を持ち、適切なタイミングで専門医へ繋ぐための重要な指針となります。「糖尿病医療連携体制講習会」や「子宮頸がんワクチン」に関する報告も併せ、多領域に関する知見が得られました。

紙面を彩る「特集 誌上ギャラリー」で

は、この1年間の表紙絵や会員の皆様の作品を拝見し、医療の現場とはまた違った先生方の豊かな感性に触れることができました。「随筆・その他」のリレー随筆は、塩盛一晃先生の「出会いと決意」です。強い意志をもった医師としての歩みに、初心を思い出しました。

各支部からの報告も活発で、顔の見える連携の温かさを感じます。

本号の結びに、伊藤先生の「弔辞」を掲載いたしました。先人のご功績を偲び、心より哀悼の意を表します。先生方が築き上げてこられた医療の灯をしっかりと受け継ぎ、次世代へと繋いでいかねばと感じます。

私自身、医師として、一人の人間として、人生の後半戦をどう豊かに生きるかを考える機会が増えました。変化を恐れず、荒波すらも楽しみながら、学び続け、そして時にはリセットしながら、患者さんと共に健やかで彩りある未来を創っていければと願っております。

寒暖差の激しい折、会員の先生方におかれましては益々のご活躍をお祈り申し上げます。

(副編集委員長 ウェレット 朋代)